

沖縄歴史の散歩道

vol.17

◆墓を巡る③◆

琉球史研究家の上里隆史氏が沖縄の歴史文化の魅力を本誌上で連載しています。



シニグンニ (今帰仁村)

亀甲墓や堀込墓といった形式以外の墓も沖縄には存在しています。宮古の島々にはミャーカと呼ばれる風葬墓があります。その形態は巨大な石棺墓で、一枚岩の大きな石でふたをし、石棺の周りを石垣で囲うものです。

来間島のスムリャーミャーカは東西9m、南北6.5m、高さ2.5mの長方形の墓で、長間家一族の墓と伝えられています。内部は3つの石室からなり、14〜15世紀の遺物も見つかっています。この墓は大正時代まで使用されていました。

平良の仲屋金盛ミャーカは16世紀に宮古島を統治した仲宗根豊見親の子、仲屋金盛の墓です。このように宮古島の各所で独特な墓を見ることが出来ます。なお仲宗根豊見親の墓はこの独特なミャーカと沖縄本島にもある横穴式の墓をミックスさせた様式となっています。彼が首里王府に従い、先島の覇権を握った背景も影響しているのでしょうか。



スムリャーミャーカ (宮古島市 来間島)

宮古地域のミャーカと似たような形式の構築物が、実は沖縄島北部の今帰仁にも存在しています。今帰仁グスク周辺の森には階段ピラミッドのような石積みみの構築物が点在しています。そのなかで最も大きいのがミームングスクです。3段に積み上げた高さは約3m、一辺の幅は約19m。物見台だった可能性も指摘されていますが、リーダー調査をおこなったところ反応があり、内部に石室のような空間がある可能性が出てきました。頂上部がくぼんでいることから、空洞部が崩れたのかもしれない。



仲宗根豊見親の墓 (宮古島市)

また近くのシニグンニは高さ1.7m、2段の石積みですが、こちらにも上部がくぼんでいます。隣にはストーンサークルのような円盤状の石列もあり、旧暦7月のトントトトン祭りの会場にもなっています。これらの石造構築物は伝承もなく何のために築かれたのか不明でした。しかし近年、台風による崩落でその一つの内部が



仲屋金盛ミャーカ (宮古島市)

上里 隆史

(うえざと・たかし)

琉球史研究家。内閣府地域活性化伝道師。法政大学沖縄文化研究所研究員。早稲田大学大学院修士課程修了。著書に『琉球という国があった』(福音館書店、2020年)、『海の王国・琉球』(ポニーインク、2018年)、『マンガ沖縄・琉球の歴史』(河出書房新社、2016年)、『尚氏と首里城』(吉川弘文館、2015年)など。NHKドラマ「テンペスト」時代考証や、NHK「ブラタモリ」案内人などメディアでも活躍。



ら男性とみられる骨が見つかり、これらが墓である可能性が高まりました。ただ埋葬者が誰なのかはわかりません。今帰仁グスクの周囲にあることから北山王関連の墓とも考えられますが、それを裏付ける証拠はまだ見つかりません。